

吉行淳之介・丸谷才一・開高 健＝編集

現代日本のユーモア文学 6

立風書房

佐藤	春夫
里見	淳
尾崎	一雄
久生	十蘭
北	杜夫
小松	左京
井伏	鱒二
牧野	信一
安岡	章太郎
木下	圭太郎
富岡	多恵子
野坂	昭如
小山	内 薫
伊藤	整
中島	敦



現代日本のユーモア文学 4



立風書房

現代日本のユーモア文学 4

編者 吉行淳之介／丸谷才一／開高健

発行者 下野博

発行所 立風書房

東京都品川区東五反田3-6-18

郵便番号141 振替/東京5-74493

電話/東京(03)447-1191(代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社難波製本

0393-R5904-8909

現代日本のユーモア文学
第四集目次

大岡昇平

犬に噛まれる……………6

徳川夢声

オベタイ・ブルブル事件……………24

坂口安吾

風博士……………38

東京ジャングル探検……………46

織田作之助

夫婦善哉……………82

星 新一

すばらしい食事……………122

不眠症……………144

暑さ……………148

古山高麗雄

サチ住むと人の言う……………156

岩田 宏

最新かぞえ唄……………178

ささやかな訪問……………181

阿川弘之

鱸とをこぜ……………186

アガワ峡谷紅葉列車……………201

〔南蛮阿房列車〕より

宇野浩二

川崎長太郎……………224

装幀 山藤章二
カバー構成 池上幸男

大岡昇平

犬に噛まれる

犬に噛まれる

淋しがり、淋しがり屋——など、あまりありがたくない名を、友達からもらっている僕である。そのほか、てれ屋、ひがみ屋など、ろくなのではない。

やたらに友達の家を訪ねるのが、僕の癖だ。子供の頃なら、よその家の方が広いとか、いい玩具があるとか、理由があつたし、二十代なら誰しも人なつかしい年頃だから、お互い様ということもあつたが、四十をすぎた今となつては、まったくの一方的になつた。

文士はよく温泉旅館などへ行つて原稿を書く。これは主として、家にいると客が来て日本家屋の構造の根本的欠陥により、仕事にならないからだ、ということになつてゐる。ところが僕の場合は全然逆だ。うちにいると、じきに友達を訪ねたくなり、また訪ねる友達がいるから困るのである。

僕は別に粒々辛苦するたちではないが、机の前にぼんやり三時間は坐つてからでないと、筆が取れない。何ということはない。雑誌にのつてゐる競争者の小説を拾ひ読みしたり、小説に出す花を図鑑で調べたり、ついでに歳時記で季節の句をながめたりした揚句、実はそういうこととあまり関係のない事柄から書き出す。

筆が進むと、何となく不安になって来る。書けるということ自身、馴れないことなので、乗りつけない乗物に乗ったように不安なのである。何処へ行くのかわからない、こんな感じがあるところをみると、つまらないことを書いているのではあるまいか。書きたいことはないことはないのだが、この調子ではいつまで経ってもそこへ行きそうもない。そこではたと筆をおく。

これは実は単に自信がないということにすぎず、文学よりはむしろ精神病理学に属する現象らしいが、そこでぶらっと外へ出て、近所の友達を訪ねるということになる。

これが大抵午後二時頃である。友達が留守であつてくれればいいが、生憎家にいて、ついにて酒でも出たりすれば、お互いに半日、悪くすると宿酔で翌日の午前中まで、つぶしてしまうことになる。極楽寺だと迷惑する友達とは、G、M両先生であつたが、僕がこんど大磯へ越して来たので、今頃はさぞのうのうとしているだろうと思うと、口惜しくてならない。

G先生は大抵午睡中であつた。まず玄関で奥さんに「いますか」とたしかめておいて、裏へ廻り、別棟の二階の書齋へ、

「おう、いるか」

と階段を登って行くと、

「おおっ、おおっ」

と牛が殺されるような声が出て、僕がガラッと襖をあげるのと、先生がガバとはね起きるのが同時である。

「おおっ、寝たっ」

と胡麻塩の頭をふり乱し、六尺豊かに、ぬくと立ち上がるついでに、赤い花模様のかけ蒲団と枕を両手にぶらさげている。押入の襖を蹴あけて、たたき込む。

「仕事じゃないのかい」と僕は形式的に訊く。

「いや、駄目だ。どうせ書けないんだ」

毎月鷗外の域に迫る問題雄篇をものしながら、先生は自分が全く枯渇したと信じているのである。少なくとも人にはそういう。

「三十年同じことをやっていれば、誰だって飽きるからな。筆が延びない」

ところがその先生の所謂「延びない」文章が、「贅肉を省き、骨だけ残したような、露らわな文章」として、評家の異口同音の絶讃を浴びているのである。

謙遜は日本人が必ず賞める美德であるから、大抵のことは謙遜しておけば間違いないと信じ、また実行もしている僕は、なかなか欺されない。

「まあ、そうおっしゃるな。延びるとか延びないとか、錯覚じゃないのかな」

「昇平さんは、そうやって澄ましていられるから、羨しいな。新進気鋭の勢いじゃ。大岡先生の傍へ住んでるのが、私の不幸です。太陽の前の星ですよ」

「大分御機嫌斜めですな。悪い夢でも見たんですか」

「大岡先生の隣にいれば、夢見も悪くなりますよ。今日はまたどういうおつもりで、陋屋へ足をお運びですか。老鶯の窮状を見下して、ほほえむためですか」

先生のいや味はこんこんとして尽きない。それが楽しみらしい。

「ビールでも飲むか」……

先生は窓を明けて、下へ呶鳴る。

「すみ子。すみ子。すみ子ったら」

声は狭い極楽寺の谷を渡り、江の電の線路を越し、向うの草山から木魂を返して来る。

「ハーイ」と母屋で奥さんの声。

「ビール二本ばかり持って来い」

やがて奥さんがビールつまみ物に乗せた盆を捧げて、階段を上って来る。坐って酌もして下さる。奥さん、少し助けて下さい。寝起きが悪くて、毒気を吹っかけられて弱つてるところです」と助け舟を求める。

「うちみたいな書けない小説家の毒気ぐらいに、おあたりになる大岡さんでもないでしょう」

「いやだなあ。G先生が何を書けない小説家なものですか。先月も六十枚書いてたじゃありませんか」「まぐれですわ。そのかわり今月はこの調子じゃ、きっと出来ませんわ。毎日毎日日本ばかり読んでるんですもの。締切の前日まで、読んでるんですよ。そして『出来ない』って断るんですもの。編集者に悪くって」

「結構じゃありませんか。僕みたいな駄け出しは、断りたくっても、断れないんです。断る方が重みがついていいんですよ。尊敬されます」

「尊敬なんかするものですか。肚の中じゃ馬鹿にしてるにきまっていますわ。第一これじゃとても引き合いません」

「うるさい」とG先生はビールをぐっと飲み干す。「余計なことをいわないで、もっとビールを持って来い。二本といたら、二本きっかり持って来る奴があるか。もう二本持って来い」

しかし先生はそのまま飲み呆けるということはない。四本をあけて、ほろ酔いになると、大抵「昇平さん、鎌倉へ出るか」という。

極楽寺も無論鎌倉市のうちであるが、切通しとトンネルのこちら側、稲村ヶ崎までは別天地である。彼方長谷、雪の下より、二階堂まで、雲の如く群った大先生と比べると、我々はちょっと格が落ちる。

G先生と僕は、そこで鎌倉へ出て、そう気易くそれら大先生を訪れることもならず、駅前のパチンコ屋で損をし、茶房「りんどろ」で、やけビールを一本飲んで引き上げる。

先生の家の前で「さよなら」というと、先生は後も見ずに、主人待顔に電気のとまった玄関に吸い込まれてしまう。

家で飲んでる先生の癖は「出よう」であるが、外で飲んでる時だと、これが「帰る」となる。

鎌倉ペンクラブの会合であろうと、たまに鎌倉センターの大先生と同席の榮に浴する尊い席であろうと、二時間をすぎれば、突如先生は「帰る」という。

この先生の「帰る」の深刻さは、聞いたことのある人でないと到底伝えられない。同じ方向の僕も、「一緒に帰ろう」とはとてもいい出す気にはならない。絶対の孤独に対する渴望の如きものを含んだ調子なのである。

「帰るっていう時、彼奴は靈感を得たんだよ。あれが彼奴の身上さ」

とは雪の下的小林秀雄大先生の註であるが、残された方は、何となく淋しい気持になる。僕のような常習被害者になると、酒が始った最初から、今にも帰るっていうんじゃあるまいか、と気になって、酒もろくろく喉を通らない。

芸術家が作品を社会の表現ではなく、芸術家個人の表現とするようになって以来、孤独は芸術家の刑罰であった。自己を表現することによってしか、芸術家は社会と相渉ることは出来ない。

ブルジョア社会では、芸術家が作品の褒賞として貰うのは金であるが、金が作品に再生産される過程は明瞭には意識されない。その結果彼等は名声の失墜を怖れて吝嗇になるか、さもないれば女と戯れ、酒を飲んで浪費してしまうことになる。

その中間の、普通中庸といわれる生活は、彼等に許されていない。自己表現という徒勞の仕事の性

質からも、浪費の習癖からも、平凡な生活に戻ることは出来ないのである。

彼等是要するに、表現するため浪費し、浪費財を稼ぐために生産するという悪循環の中にある。G先生二十年の悪戦苦闘は、こういう現代の芸術家の孤独の、最も尖鋭な現われの一つと思われる。

批評家がかつて芸術品の社会的評価の代弁者であった、伊藤整被告に対する中込検事の如き、「公共の福祉」を背負った、誅斂苛酷の審判官であった。彼等は必ずしも孤独ではなかった。

ところが近頃はいつか「批評は表現なり」の合言葉が生れ、評論が自己表現の新形式として主張し始めた。小説家だって十九世紀までは、物語で自己を表現するなど考える者は一人もいなかったのだから、二十世紀ともなれば、批評家が論理で自己を表現したって悪い理窟はない。

ただ僕には批評家が小説家と競争して、同じ孤独地獄へ堕ちたがっている魂胆だけは、どうも納得が行きかねる。

極楽寺のもう一人の住人、M先生は、こういう一般的な批評の自己表現の風潮の中にあつて、珍らしく批評のポアロー的權威を恢復しようとしている人である。先生の有名な「であります」文章は、批評から自己表現の臭味を脱し、説得という謙遜な機能に返そうという試みのように思われる。先生は落着き払っている。

先生と僕とのつき合いは、G先生に対すると同様、僕の方から随分しょつ中訪れるが、先生の方からは、まず十度に一度も来ないという間柄である。一般に僕が訪ねるより余計に訪ねられた友達は、あとにも先にも、死んだ中原中也一人である。

M先生は昔から人一倍とつきにくい様相を具えていた。先生は僕とは小林秀雄大先生の兄弟弟子だが、彼は僕を全然軽蔑していた。以前小林先生の家と十間と離れないところに下宿していた頃、小林大先生の家へは来ても、ついでに僕の室へは寄る気には、絶対になつてくれなかったものである。

先生はその頃は二葉亭四迷の勉強に忙しかった。今は東京の大学の講義とか、本屋の顧問とか、座談会とか、ギリシャ語の勉強とかで、さらに忙しい。

その合間の執筆の時間を潰しに行くのだから、こっちも流石に遠慮して、なるべく昼飯時に推参して、大兵肥満の先生が、井のような茶碗のおかわりするのを見物しながら、御高説を拝聴することになっている。

午後二時頃に万年筆がはたと僕の手から落ちるのは、丁度これが先生の昼飯時に当たっているからである。

僕と話をする時間は、同時に先生が子供と遊ぶ時間に当たっている。十と七つの女の子を、先生はなめるように可愛がる。

「俺みたいな奴の子供に生れて来たのが、可哀そうだからな」

という説であるが、これは先生の批評文の緻密な論証と比べて、やや大ざっぱな理由付けのように思われる。はかない文士の子に生まれて来た子は、たしかに可哀そうであるが、それだけでは積極的可愛がる理由として十分ではないと、子供を少し構わなすぎるのではないか、と後めたい思ひの僕は考えている。

先生は若い頃療養生活を送った経験があるから、忙しく頭と体を使う今日この頃は、一段と体に気をつけている。煙草もやめた方が調子がよいと積極的理由でやめてしまった。(我々は万人に一人やめる奴でも、体に悪いという消極的理由でやめるのだが)奥さんは女同士でつくづく述懐したそうである。

「うちのパパはたばこやめられる人だからこわいのよ」
この話を洩れ聞いた僕が、

「へへえ、奥さんは自分が煙草くらい必需品だと思ってるのかね」

これがまた奥さんの耳に入って、以来奥さんは僕の断乎たる敵となった。僕が行っても決して下駄を揃えてくれない。

今年のお正月珍らしく揃えてあったので、やっと御勘気がおりたかと、喜び勇んで穿いて出ると、

「大岡さん、大岡さん」

と呼びとめられた。

「それババの下駄よ、いやあね、こんないい下駄、大岡さんに穿けるわけじゃないの。穿き心地でわかりそうなもんだわ。大岡さんののは、こっちよ」

僕のちよび下駄は、やはり沓脱の下に、脱いだままの姿勢で並んでいた。

奥さんは先生を日本一偉い先生と思っていると同じく、その持ち物は日本一いいと思って揃えておくのである。

先生が去年読売文学賞を貰い、夜半文化部員が自転車で知らせに来てくれた時、僕は偶然同席したが、奥さんは途端に室の中をぐるぐる廻り出した。猫じゃ猫じゃを踊るみたいに、両手をちょいちょい顔へあげるのは、眼尻にたまる涙を払うためらしい。おお、幸福なる夫婦よ。

先生は近所の家に仕事部屋を借りて、締切間際になると、毎日昼間手提鞆に原稿紙をつめて通っている。

先生の着々たる仕事振りもまた、僕の垂涎おく能わざるところである。僕も真似をして近所の知合いの離れへ行って見たことがあるが、半日家にいるよりなお落ちつかない思いで、立ったり坐ったりしただけだったので、一度でやめてしまった。出張先なら僕はどうしてもまる三日は、空費した後でないと筆が取れない。

奥さんはなかなか先生の行く先を教えてください。女中まで、

「明日お宅へ伺うとかおっしゃってました」

と「だから今日は帰れ」といわんばかりのいい草である。

来ると予告されると、落着かなくなるのも、僕の性分である。そこで、

「いや、ちょっと急用があるんだ」

と無理矢理に行く先を聞き出して、押しかけて行く。

先生は稲村ヶ崎の海の見晴しのよい二階に、手提鞆を枕に午寝していた。

「ふむ、出張して午寝するのは、なかなかいい気持だよ」

急用というのは、四五日前に貸したバルデーシュの『小説家バルザック』がちょっと必要になったという、無論口実である。

先生は無論読んでしまっていた。

「君が筋を引いたところを見ると、小説家がどういうところに興味を持つかがわかって、興味があるね。ほんとこへ筋を引きなくなったから、俺も買うことにする。明日返しに行こうと思ってたんだが、今要るなら机のそばの本箱にあるから、失礼だが持って帰ってくれ給え」

顔を見れば、僕の気はすんだ。

「じゃ」と立ち上ろうとする僕を、先生は、

「まあ、もう少しいいじゃないか」

と引き留めてくれる。雑談暫くあって、また帰ろうとしても、三度までは引き留める。

邪魔だと知りながら、来ずにいられぬ僕の性分に、邪魔だと思わさない心遣いと、心の中では手を合わせつつ、